

タイトル 「宗方さんが来るまで」

Parade556

梗概

両親が他界。空き家となった生家を空き家バンクに預けている瀬田一彦と妹、車一花。

空き家に不審者が入り、兄妹は集まることに。鍵を預けている空き家バンクの担当者・宗方が来るまでの間、兄妹は玄関ドアの前で言い争いをはじめめる。

瀬田は、実家に住むと言っていたのになかなか住まない一花をなじり、休職中の夫・勝彦に言及する。

対する一花は、瀬田が金に不自由していないのは妻・優香のおかげだとののしり、瀬田も知らない優香が会社を独立する話などをはじめめる。

そこへ、隣家の森山美鈴（71）が顔を出す。幼少期から二人を知っており、何歳になっても二人は一彦ちゃんであり、一花ちゃんであった。二人も、美鈴の前では取り繕う。

美鈴の息子で、二人に優しくかった孝介が今年で20回忌を迎えた話や、孝介との思い出話。そして瀬田と不仲だった国立大教授で、この家の持ち主だった父親の話になる。

宗方楓（24）が現れ、二人は家に入っていく。

登場人物表

瀬田一彦（37） 会社員（トレーダー）・一児（3歳・娘）の父親

車 一花（35） 一彦の妹。専業主婦。二人の子供（11歳の長男と7歳の長女）の母親

森山美鈴（71） 隣人

宗方楓（24） 空き家バンクの担当者

本文

舞台は、瀬田一彦（以下、瀬田）、瀬田の妹 車一花（一花）の生家であり実家。

場所は都下。

国立市駅前の大学通りのような瀟洒な一軒家が並ぶ住宅街。その中ほどにある2階建ての一軒家がモデル（二人の父親は国立大学の教授。学長も経験している）。

瀬田と一花は玄関ドアの前で、空き家バンク担当者の宗方楓を待っている。

1 mほどのフェンスを隔て、隣家・森山家の勝手口が見える。

瀬田 だから言っただろ。早く住めって

一花 こっちにも事情があるの。兄さんにはわからないだろうけど

瀬田 事情なんかないだろ。今、勝彦くん、仕事してないんだろ？

一花 転職中

瀬田 バカ。なんで、仕事やめさせたんだ

一花 ソレ、今、関係ないじゃない

瀬田 つながるだろ。全部が

一花 今は、家に不審者が入ったって話でしょ

瀬田 だから、早く住めって言ったんだよ

一花 それと旦那の仕事は関係ない

瀬田 だから、仕事してないんだからすぐ動けるだろってこと

一花 むしろ、忙しくなるの。仕事探してるんだから

瀬田 何だ、その理屈

一花 兄さんにはわからないわよ

瀬田 わかりたくもないね

一花 ソッチだって、優香さんが優秀なだけじゃない

瀬田 俺たちは同じくらい稼いでる

一花 優香さんの方が稼いでくるくせに

瀬田 無職のヤツが言うな

一花 何よ。ムカつく

瀬田 俺はちゃんと働いてるぞ

一花、実家のドアをガンと蹴る。

瀬田 バカ。蹴るな

一花 バカバカうるさいな

一花、またドアを蹴る。

瀬田、一花の蹴りをブロックしようと思えば足を出すと、その足を一花は蹴飛ばす。

瀬田 いてえな

一花 足なんか出すからでしょ

瀬田 バカ。資産価値が下がるだろうが

一花 どうせ売るんだからいいじゃない

瀬田 だから、その時の価値が下がるんだよ

一花 お金なんていらんやないの？兄さん家は^ち

瀬田 いるよ。あればあつただけ良いに決まってるだろ

一花 優香さんに食べさせてもらえばいいじゃない

瀬田 バカ。俺の収入がないと今の生活はできないんだよ

一花 優香さん。独立するって

瀬田 は？なんだソレ

一花 言ってた。この間

瀬田 お前ら、なんでつながってたんだよ

一花 ただの情報交換だけよ

瀬田 バカ。オマエ、何もしてないんだから、いらんやないだろ。情報なんて

一花 してるわよ。主婦。専業主婦。私が家守ってるの

瀬田 ふつ。何が家を守るだよ

一花 年収に換算したら、1300万くらいになるんだから。兄さんより稼いでるわよ

瀬田 バカ。どんな計算したらそんな数字になるんだよ

一花 ちゃんとした計算だから

瀬田 だから、その根拠を言えってんだよ

一花 優香さんの年収ぐらいよ

瀬田 アイツ、そんなもらってんのか

一花 もうすぐ超えるみたいだけど

瀬田 そう言えばさつき、独立するって言ってたな

一花 そうよ。自分で会社やるんだって

瀬田 何の？

一花 そこまでは聞いてない

瀬田 なんだ。ベビー用品の仕事かな

一花 聞いたらしいじゃない

瀬田 聞けるか。そんなこと

一花 そしたら一億くらい行くんじゃないの。年収

瀬田 バカ。全労働者の0,03パーセントしかいないんだぞ

一花 だから、それになるのよ

瀬田 働いたことないヤツが言うな

一花 あるわよ。3年間

瀬田 ちよこつとお茶くみやったくらいだろ

一花 違うから。もームカつくなあ

一花、ドアを蹴る。

瀬田 バカ。だから蹴るなつての。何度言ったらわかるんだ

一花 バカバカ言うな。バカ

瀬田 オマエにバカなんて言われる筋合いないわ

森山美鈴（71） 隣家の勝手口から顔を出す。

美鈴 あらあ。一彦ちゃん？それに一花ちゃんも

瀬田 あ、こんにちは

一花 こんにちは

美鈴 声したから。どうしたの？

瀬田 いや、すいません。不審者の件

美鈴 そうなのよお。なんか、ごごと物音するから、最初ね、一彦ちゃんかと思ってね、「一彦ちゃん？」って声かけたの。そしたら違ったのよお

一花 良かった。おばさんに怪我がなくて

瀬田 ほんとすいません

美鈴 もうおばちゃんじゃないわよ。おばーちゃん

一花 まだお若いですよ。ね？

瀬田 うん。まだお若いですよ

美鈴 でも一彦ちゃん、ほんとご立派になってえ

瀬田 いやいやそんな

美鈴 一花ちゃんも綺麗になったわねえ

一花 そんなことないですって

美鈴 そろそろ帰ってらっしゃいよ

瀬田・一花 え？

美鈴 せつかくご両親が残してくださったお家があるんだもの

瀬田 えーと。なあ

一花 うん

美鈴 またお隣さんになれたら、おばちゃん嬉しいな。あら、おばあちゃんって言っちゃった。自分のこと。おばーちゃん。訂正させて

美鈴の家の中から電話の音がする。

美鈴 あ、ちよつと待っててね。はいはい

美鈴、勝手口のドアを開けたまま、走り去っていく。
以降、瀬田と一花は声のボリュームを落として喋る。

瀬田 なんで住むって言わないんだよ

一花 まだ決めてないし

瀬田 じゃあ売るぞ。この家

一花 なんでよ

瀬田 オマエ、空き家バンクに管理料払ってるの俺なんだぞ

一花 優香さんじゃない

瀬田 違うよ。俺の給料からだ。アイツには頼ってない

一花 ウソ。頼りっぱなしの癖に。家のローンとか

瀬田 ウチの家庭のことに口出すな

一花 声が大きいのよ。バカね

瀬田 くそっ

一花 聞こえないように喋ってよ。バカ

瀬田 住まないなら売ろぞ

一花 兄さんには、心がないのよ

瀬田 何の話だよ

一花 この家で生まれて育ったのよ私達。父さんと母さんと一緒に過ごした思い出の場所じゃない

瀬田 今は、ただの空き家だろ

一花 過去のこと。昔のこと。何も感じないの？

瀬田 だからそれが何なんだよ

一花 そんな簡単に壊せるもの？思い出までなくなるのよ？

瀬田 不審者が入るくらいなら壊すよ。もう老朽化も酷いしな

一花 良いわね。マンション暮らしは

瀬田 持ち家なんて今時、意味ないだろ

一花 優香さんは欲しいって。お家

瀬田 ウチの家庭のことは良いんだよ。それより勝彦くんの仕事のことをだな

一花 その勝彦くんって呼ぶの止めてくれない？兄さんより年上なのよ

瀬田 は？

一花 失礼よ。年上の人に対して

瀬田 大きい声出すな。バカ

一花 ほんと、心のない人。優香さんも言ってた。静稀ちゃんが、パパに似ないと良いけど

瀬田 娘は関係ないだろ

一花 大きな声出すな。バカ

瀬田 なんだと

美鈴、勝手口から顔を出す。

美鈴 オレオオレオ詐欺

瀬田 オレオオレオ？

美鈴 母ちゃん、母ちゃんって

一花 それ、オレオレ詐欺じゃない

美鈴 え？おばあちゃんなんて言った？

瀬田・一花 オレオオレオ詐欺

美鈴 何それー。あ、またおばあちゃんって言っちゃった。おばーちゃん

一花 そういえば昔、おばちゃんの家で、よくもらってたな。オレオ

美鈴 オレオって？

一花 お菓子。黒いクッキー。クリームが中に入ってる。兄さん憶えてない？

瀬田 ああ。もらったもらった。オレオとソフトサラダ

一花 あった。ソフトサラダ

瀬田 ウチが、お菓子ダメだったから

美鈴 立派なお父様だったじゃないの。国立大の教授よ。最後は学長までなられて

瀬田 きつかったですよ。正直

一花 私には優しかったけど、兄さんにはね

瀬田 だから俺、高校出てすぐ実家出たんですよ

一花 父さん。寂しがつてたよ

美鈴 そうよ。ねえ？

一花 うん。気にしてた。兄さんのこと

美鈴 気にしてたわよ

瀬田 親父が？信じられないな

一花 言葉にするのが苦手な人なの

瀬田 大学の教授だぞ。言葉のプロだろ

美鈴 教えることと伝えることは違うわよ

瀬田 おばちゃん

美鈴 おばーちゃん

瀬田 なんか、おばーちゃんとは言えないよ

美鈴 ウチの孝介、もう来月で20回忌よ

瀬田 あ、もうそんなに…

一花 コー兄。優しかったな

瀬田 ああ。優しかった。最後に会った時、鮎釣りに連れてってもらったんです

美鈴 そうなの

瀬田 コー兄の車で。コー兄、免許取りたてで、ビビリながら運転してて

美鈴 あの子、臆病なところあったから

瀬田 でも、楽しかった

一花 お菓子が美味しかったのと、コー兄が優しかったこと思い出します

美鈴 あの子、優しい子だったわよね

瀬田・一花 はい

美鈴 うふふ

一花 え？さっきのオレオレ詐欺って

美鈴 そう。「俺だよ、孝介だよ」って

一花 そうなんだ。で？で？

美鈴 「ウチの孝介は20年前に死にましたよ」って言ったら電話切れた

一花 ソレ、ほんものだったらよかったのに

美鈴 そうね。もつと声聞いとけばよかった

一花 声、似てた？

美鈴 うん：どうだろう

一花 なんか、コー兄の感じあった？

美鈴 おばちゃん。もう年かな、だんだん忘れていつてるの

瀬田 俺は、すごい憶えてるよ

美鈴 一彦ちゃん

瀬田 コー兄の笑い声、こっちまで嬉しくなるような笑い方だった

美鈴 そうね。そうだったわよね

一花 それとオレオ

瀬田 ソフトサラダもな

美鈴 おばちゃん。憶えてないのよ。そんなお菓子あげたっけ？

瀬田 西友で安かったんじゃない？

美鈴 そうかも。おばちゃん、セールのお菓子ばかり買ってたもの

瀬田 羨ましかった

美鈴 どうしてよ。セール品よ

瀬田 俺、スーパー行ったことなかったから

美鈴 え？そうなの

一花 そう。買い物は母さんと私の役目。男がスーパーなんか行くなつて。父さん

瀬田、家を見上げて、

瀬田 ほんと、窮屈なトコだったよ

美鈴の家電が鳴る。

美鈴 あ、また電話

一花 今度はちゃんと話してよ

美鈴 そうする

美鈴、家の中に戻っていく。

二人、美鈴を見送ったあと、家を見上げながら、

瀬田 オマエの好きにしろよ

一花 管理料、私、出す

瀬田 良いよ。それくらい俺が出すよ

一花 迷惑かけたくないし

瀬田 いいから。いいよ。俺に任せてくれ

一花 ほんとに？

瀬田 ああ

一花 …ありがとう

瀬田 ああ。うん

一花 昔のこと、ちよつとは思いついた？

瀬田 思い出したくないことまで全部な

一花 父さん。ほんとに兄さんのことが一番好きだったのよ

瀬田 それはわかってたよ

一花 なら、どうして？

瀬田 俺も、伝えるのが下手なんだ

一花 優香さんも言ってた

瀬田 もう、そこつながらないでくれよ

二人、顔を見合わせて笑う。

宗方楓が現れる。

楓 お待たせしました

瀬田 あ、どうも

一花 楓ちゃん。ちよつと痩せた

楓 わかります？なんか最近、彼氏に振られて

一花 私、前から反対してたでしょ？美容師はダメ。ロクな男いないから

楓 一花さんの言った通りでした

瀬田 オマエ、宗方さんともつながってるのかよ

楓 あ、開けますね

楓、玄関ドアのキーを使い、ドアを開ける。

楓 さ、どうぞ

瀬田、立ち止まる。

一花、瀬田の背中を押す。

一花 兄さん

瀬田 いや、ちょっと待ってって

楓 あ、家には入り込んでませんから。庭です庭

一花 そういうことじゃないみたい

瀬田 オマエ、先入れよ

一花 長男が先でしょ

瀬田 オマエなあ

一花 さ、勇気を出して

瀬田 よし

楓 なんか大げさだな

一花 なんでも大げさにしたがるから。男って

楓 ですよねえ（ねえは、一花と揃える）

瀬田 うるさいな

瀬田、勇気を振り絞って家に入っていく。

一花もつづく。

楓、ドアを閉める。

美鈴、現れて、

美鈴 ちょっと聞いてよお。アレ？

美鈴、二人が家に入ったことに気づき、笑顔になり勝手口を閉めて家に入っていく。

【了】